

経営リースの取組事例

徳島県内における畜産環境リース事例

徳島県農林水産部畜産課 係長 岡久靖司

しかしながら、本県においても、年々畜産農家数が減少するなかで、飼養規模を拡大する経営も見られ、健全かつ安定的な畜産経営の発展には、畜産環境保全の取り組みが必要不可欠となっております。

平成11年の「家畜排せつ物法」施行以降、当時不適切な管理を行っていたり、恒久的な施設を利用せず簡易対応を行っていた畜産農家等を対象に、また、平成16年の同法完全施行後も、簡易対応農家を対象に1/2補助付きリース事業を主体に、国、県の各種補助事業を利用した家畜排せつ物の処理施設の整備を行い、畜産環境保全に取り組んできております。

そこで今回は、本県における1/2補助付きリース事業にて家畜排せつ物処理施設を整備した事例について紹介します。



図 徳島県穴吹町・那賀川町

■徳島県の概要及び畜産の現状

徳島県は四国の東部に位置し、東は瀬戸内海から太平洋に至る紀伊水道、北は東西に走る讃岐山脈を境に香川県に、西は愛媛県、南は高知県に接しています。

本県は山地が約8割を占め、四国第二の高山である剣山を中心とした剣山地は県を南北に分ける分水嶺で、その北方を流れる吉野川は水源を遠く高知県に発し、本県に入り、池田町から東に転じ、東流するにしたがい広く、くさび形となり、農業の中心地帯である徳島平野を形成しております。

また、分水嶺に源を発する勝浦川及び那賀川下流の海岸線に沿った平野部は広く水田地帯となっております。

本県農業の概要は、京阪神地域の大消費地に近いことから、様々な農産物に対する需要に対応するため少量多品目生産に特徴ある農業経営が展開され、大消費圏に対する生鮮食料品の供給地としての地位を築いております。

畜産については、本県農業産出額（平成17年）1,094億円のうち、野菜に次いで多い299億円（全体の27%）と本県農業の重要な地位を占め、畜産物の処理・加工・流通等を通じて多くの雇用の場を創出するなど裾野の広い地場産業を形成しています。

■佐條 計さんの事例

徳島県は、地鶏肉生産量日本一の「阿波尾鶏」に代表される肉用鶏の生産県であり、その生産農家は県西部地域に集中しています。

佐條さんにおいては（写真1）、徳島県の西部、清流穴吹川が流れる美馬市穴吹町にて、ブロイラーを飼養し、5棟の鶏舎で年間5万羽を出荷しています（写真2）。

佐條さんは、家畜排せつ物法施行後も出荷後の鶏舎を鶏ふんの一時保管場所として利用し、未処理のまま随時近くの耕種農家へ譲渡、余剰分については、



写真1 佐條さん



写真2 鶏舎

自己農地に直接還元を行っていました。

しかし、未処理物であるため、撒布時の悪臭問題等から引取先・引取量も少なく、自己所有地への過剰還元による水質汚染等の畜産環境問題の発生が危惧されておりました。

そこで、平成17年度に1/2補助付きリース事業でたい肥舎整備とショベルローダーの導入を行いました(写真3)。



写真3 整備たい肥舎

施設導入にあたっては、他の養鶏農家の事例を参考に、これからの経営継続を考え、維持管理費が安価で、管理も容易であり、全国的に普及しているショベルローダーによる切り返し方式のたい肥舎を選択しました。

たい肥舎に搬入された鶏ふんは、加水された後、定期的に切り返しを行い、発酵温度も60℃以上に上昇するなど良質なたい肥が生産されています。(写真4)

また、生産されたたい肥も、以前の未処理物に比べ汚物感もなく、近郊の耕種農家にも好評を得ています。

さらに、発酵処理を経て生産されたたい肥は、昨



写真4 生産中のたい肥

今の材木需要の低迷で入手が困難となっているオガクズの代替え物として、入糶時に敷き料の一部代替え物として利用しており(発育試験等実証試験済みで、発育上の問題は特に無い)、生産コストの低減とともに、たい肥非需要期の新たな利用方法となっています。

なお、たい肥を敷き料に利用することにより、オガクズに比べ、色が濃いことから鶏舎内が暗く感じられ、糶がおとなしくなる等の二次的な効果もあるとのことでした。

堆肥舎整備前は、鶏舎を鶏出荷後も鶏ふん一時保管場所として利用していたことから、鶏ふん全量が搬出されるまで清掃、消毒も行えず、還元先の決定が出荷後の作業行程を左右する大きな要因となり、特にたい肥の非需要期には大きな問題となっていました。施設整備後は、出荷後の鶏ふん搬出、清掃、消毒もスムーズに行える等のメリットも発生しています。

佐條さんが整備を行った堆肥舎を参考に、鶏ふん処理施設を所有していない他の肉用鶏農家においても、同様な施設の整備がなされ、適正な鶏ふん処理が行われています。

■延 隆久さんの事例

延さんは、徳島県南部を東西に流れる那賀川の河口近く、阿南市那賀川町にて和牛肥育を行っております。

現在、約300頭の黒毛和種肥育牛を自動給餌機が導入された牛舎にて、省力管理による生産を行っており(写真5・6)、また和牛肥育とともに、町内で精肉店も営んでいます。

かつて延さんのご両親においては(写真7)、地域内の耕種農家とともに組合を結成し、県単独補助事



写真5 牛舎



写真8 改造後のたい肥



写真6 自動給餌

業により堆肥舎の整備を行い、いちご、キュウリ、その他露地野菜の栽培を行う組合員へ良質たい肥を供給しておりました。

その後、規模拡大に伴い、既存たい肥舎では処理能力が不足するところとなり、敷き料の交換間隔の延長や自己所有地等に直接生ふんを還元するなど緊急避難的な対応をしておりましたが、たい肥非需要期には、自己所有地へ過剰還元を行わざるを得ない等の問題を抱えておりました。



写真7 延さんのご両親

そこで経営移譲等を機に、1/2補助付きリース事業を利用しH17年度に規模拡大により不足する施設分について、たい肥舎の整備を行いました。

延さんにおかれましても、単純な構造で、ランニングコストがかからない堆積・切り返し方式のたい肥舎を採用し、現在も牛舎から搬出される敷き料とふん尿混合物を、定期的に切り返し処理が行われ、良質たい肥の生産が行われております。

しかし、今回リース事業で設置したたい肥舎は、周囲に水田が広がる障害物がない場所に建設されており、弱い風雨でもたい肥舎への雨の降り込みがあり、強風雨の際は、雨水により隣接する農業用水へたい肥の流亡が危惧されたため、雨水対策として改造届出を行い、擁壁上部の開口部へのカーテン設置やエプロン部への屋根の延長を行う等、たい肥舎設置後の二次的な環境問題発生防止にも積極的に取り組んでおります(写真8)。

延牧場のある那賀川町は、広域圃場整備が行われている水田地帯でもあり、現在も水稲の裏作には、ブロッコリーや菜の花等の野菜栽培が行われており、生産



写真9 袋詰めたい肥

されるたい肥は主に地域内の耕種農家への供給されており、また、袋詰めによるたい肥販売も行っており（写真9）、耕種農家のみならず家庭菜園利用者を対象としたたい肥流通にも取り組んでおり、町内には2箇所の無人たい肥販売所を設置するとともに、JA直販所へ自家菜園で野菜を生産・出荷を行っている方などからの引き合いも多く、利用者から好評を得ておます。

■最後に

徳島県においても、耕種農家、畜産農家数は減少し続ける一方で、畜産農家の一部では、飼養規模の大型化も進み、共同利用による家畜排せつ物処理施設の整備は、ますます困難な状況となってきています。

個人で実施可能な1/2補助付きリース事業は、本県の家畜排せつ物処理施設の整備に大きく貢献しましたが、今後これら施設でいかに良質たい肥を生産し、スムーズな流通を行うかが課題となっています。

今回紹介した事例は、たい肥舎整備による畜産環境保全への取り組みに留まらず、たい肥非需要期の利用促進に取り組む等、良質たい肥の生産とスムーズな流通が行われている事例であると考えます。

しかし、一方で現在も恒久的な処理施設を所有しておらず、簡易対応を行っている農家がまだ残っております。

更に、肉用鶏が多く飼育される中山間地域全体を見ると、たい肥需給バランスが著しく不均衡となっており、家畜排せつ物をたい肥化处理以外の利用も選択枝の一つとして考える時期にきており、それら試験的な取り組みも一部で始まっております。

本年度を最後に、1/2補助付きリース事業が終了することは残念ではありますが、処理施設未整備農家に対しては、各種助成制度を利用しつつ地域実情に応じた施設整備を推進するとともに、今回の事例を参考に、今後ともたい肥の流通促進、ひいては畜産環境保全に取り組んでいきたいと考えております。

